

育児不安と虐待

Childcare Anxiety and Abuse

——子育ては楽しいですか？

Is Child Rearing Fun ?

大原 美知子 OHARA, Michiko

- 東京都医学研究機構 東京都精神医学総合研究所 薬物依存研究部門
Tokyo Institute of Psychiatry, Tokyo Metropolitan Organization
for Medical Research, Department of Substance Abuse



育児不安, 母性意識尺度 (母親役割の受容に対する意識),
親子関係検査 (PBI), 児童虐待, 母親への支援

Childcare Anxiety, Maternal Consciousness Scale (Consciousness of
Acceptance of the Maternal Role), Parental Bonding Instrument (PBI),
Child Abuse, Mother's Support.

ABSTRACT

Abuse consultation by telephone is conducted at a child abuse prevention center. The content of this telephone consultation displays much child-rearing uneasiness about abuse from the mother. A questionnaire was conducted. The target population was a mother, living in Tokyo, and with a 6-year-old (or less) child. We analyzed the results using the Maternal Consciousness measure. The feeling of negative consciousness was influenced by the relation with the husband and the childcare cooperator's existence. According to the Parental Bonding Instrument (PBI), groups with the high expression of negative Maternal consciousness were a low care and high protection. It was suggested that various types of support for the mother is important for maintaining motherhood.

1. はじめに

最近の新聞のアンケート調査によると、「育児が楽しい」と答えている人は全体の 51% とあり、逆から見ると、育児を行っている人の約半数は育児に楽しさを感じていない。これは、育児はもともと楽しいものではなかったのが表明できるようになったのか、また昨今問題になっている少子化の一因とも考えられる育児負担がその要因なのか、判然としていない。しかしながら育児を楽しめないまでも、育児に拒否感・否定感しかもてない状況があるとしたら、それらへの放置・無視はできないのではないだろうか。

子供の虐待防止センター（社会福祉法人）では虐待防止を目的とした電話相談を行っており、そこにたずさわった経験から、多くの母親が育児に対し「負担感」や「逼塞感」を抱いていることが推測された。

子供の虐待防止センターへの電話相談の内容は、大きく分けると「育児不安相談」と緊急に介入を必要とするいわゆる「虐待相談」がある。「虐待相談」は相談全体の 2 割弱程度であり、大半は育児不安を抱えるお母さんからの相談である。育児不安の中でも「自分が虐待してしまうのではないか」、又「自分がやっていることは虐待なのではないか」と、いわゆる虐待の「危惧」についての相談が 77%、約 8 割を占めており、この中には、今後何の援助も無ければ「虐待」に移行してしまうのではないかと予想される虐待予備軍をも含んでいる。電話相談をしてくるお母さんたちの多くは、子供にあたることでストレスを発散させていることを意識的にせよ無意識的にせよ、まずいと感じている人たちである。夫や他の援助者が誰もいず、ひとりで育児に孤軍奮闘している内に疲れ果ててしまう。そして疲れていることを意識化できず、「他の人はちゃんとやれているのにあたりまえのことがやれない私は駄目な母親」（他の人は楽しそうに子育てをしているのに）と自分を責めてしまう。まわりに助けを求めることは即母親失格であると思っっているため、自分から助けを求めることも難しく、母子 2 人はますます孤立し、その結果母親

の鬱屈した思いは子どもへと向かっていても不思議ではない。

2. 母性神話はどこから生まれたか

母親をこのように追い込んでいる要因はどこにあるのだろうか。母親として子を生む能力イコール育てる能力であり、母性愛は本能として自動的に備わっているという了解と「おなかを痛めた我が子が可愛くないはずがない」という価値観の刷り込みは女性として生まれてきた時から始まっており、多くの学問がこの価値観を維持する役割を果たしてきている。そして特に心理学はこの考えに多くの貢献をしてきた。

Freud の精神分析理論では母親と父親の役割機能を分別し、母親と子供の相互依存を断ち切るための父親の役割と超自我形成をその理論の基礎としたが、彼がいた当時のウィーンの家家庭形態では父親が家計責任、母親は養育責任を負うという役割分担が一般的であった。またフロイドの精神分析を研究の始点とした Bowlby (1951) は劣悪な環境条件下にある施設の子を対象とした研究で、子供の発達の遅れや異常の原因を「母親の不在」にあるとし、母と子の絆をフロイド同様絶対視した。その結果、子供を育てるに最適なのは母親であるという母性神話が成立したのである。Bowlby の母性剥奪理論は、3 歳までは母親が育てないと子どもの成長に大きな損傷を与えるという「3 歳児神話」を生み、多くの人々の育児観に影響を与え、現在に至っている。子どもは母親が全てをなげうって育てるものという母性神話のもとに母親達は子育てをしているはずであるが、児童相談所の統計 (1997 年) によると虐待するのは実母が最も多く 50.8%、次は実父の 28.5% とあり、実母が圧倒的に多い。子どもを愛し、守るはずの母親と新聞その他マスコミで報道される「児童虐待」の加害者としての母親を我々はどうかとらえたら良いのだろうか？

3. 現在の母親の生育背景

現在子育てまっさかりの母親を仮に30歳とすると、その母が生まれたのは1970年代である。1970年代は、万国博覧会など高度経済成長は陰りを見せながらも続いており、社会全体が経済的に右肩上がりの上昇基調にあったと言える。また団塊世代の第二次ベビーブームのピークでもあった。経済的豊かさに支えられたエネルギーは家族、特に将来の安定を保障する子ども達に向かったと言って過言ではないだろう。教育ママなる言葉が現れたのも1965年くらいからであり、子ども達は習い事に追われ、同時に進学塾、落ちこぼれ問題など親の教育熱にあおられた様々な事象が噴出してきた時代でもあった。その時代に育った母親達は、いじめ・校内暴力などの試練をくぐり抜け、大学進学するときも、大学進学率がはじめて男女逆転する(1989年)と言う事象からも理解されるように、競争社会をまさに生き抜いてきた人たちである。学校では勉強にがんばればそのまま評価されることを当然として生きてきた彼女達は雇用機会均等法(1985年)の元に就労している。ガラスの天井という目に見えない差別を受けながらも就労・結婚し、出産したときには旧来どおり母親が育てないと子どもはダメになるという「母性神話」により、専業主婦となった人々が、育児を担っているのが現状と言えよう。こうした中で、母親達が育児に対し、どう感じているのか、電話相談から聞こえてくる彼女らの声から以下のような特徴をあげることができる。

- ①核家族世帯でしかも母親一人が育児を背負うという役割分担に対し、怒りを感じながらも怒りを抑圧され、表明できない怨嗟
- ②競争社会の中、他者評価で育ってきた母親は自分の感覚に自信を持てにくいため、不安感を感じやすいが、言ったら母親として落ちこぼれとなるとそれさえも言えない状況。(ちなみにたまごクラブ・ひよこクラブなど育児雑誌の発刊も1990年代からである)
- ③子育てに対し評価されないいらだたしさは子ども

への過度の期待へと傾斜し、「標準」からはみ出た子供は子育ての失敗として、母親の自尊心をますます低くさせる。

- ④自分がこんながんばっているのに、子が自分の思うようにならない怒りは子どもへと向かい発散されるが、それは同時に愛する子に苛立ちをぶつけた自責感となり、それがはまた子どもへの苛立ちを生み、悪循環となる。

これらのことから現在子育て中の母親がどのような思いで育児を行っているのか、それが現在の児童虐待の問題にどう関わっているのかを検討するため、子供の虐待防止センターに協力し、アンケート調査を行った。今回その調査の一部である母性意識と虐待との関連を検討したので報告する。

4. 調査結果と考察

調査目的：子供に対する暴力や放置に関する、一般人口での実態を把握し、そうした行動や養育上の問題のリスクファクター要因を多面的に検討する

対象：東京都在住で満6歳以下の子を持つ母親
対象者数と方法：

抽出方法：層化二段無作為抽出法(調査地点は120地点)

調査方法：郵送配付・訪問回収

調査期間：平成11年10月15日～11月7日

回収状況：標本数 2400 回収数 1538(回収率64.1%)

(1) 回答者の属性

母親の平均年齢は33.6歳、家族構成は77.6%が核家族であった。母親の学歴は高校卒業以上の学歴を有するものが63.4%であった。学歴を高校までと高校卒以上の2群に分け、それと就業形態とのクロス解析をしたところ、フルタイムとパートタイムに逆転現象が見られたが、専業主婦との差は殆ど見られなかった。このことから高学歴であっても、必ずしも仕事を継続しているわけではなく、出産後育

児に専念している人が多かった。(図1)

(2) 母性意識尺度(否定項目)の解析

母性意識尺度は大日向雅美(1988)により開発されたもので、母親であることの肯定的意識と、否定的意識の2側面を測定するものである。今回はそのうち母親としての消極的・否定的意識を測定する項目を用いた。

- ・子供を育てることが負担に感じられる
- ・育児にたずさわっている間に、世の中から取り残されていくように思う

- ・自分の関心が子供にばかり向いて視野が狭くなる
- ・自分が母親として不適格なのではないだろうか
- ・子どもを産まないほうが良かった
- ・母親であるため自分の行動が制限されている

①母性意識否定項目推移(平均値)

大日向の行った調査(1988年)とを比較し、約10数年間の推移を見たところすべての項目で、否定意識は高くなり、特に「子育てが負担に感じる」項目が最も上昇していた。(図2)

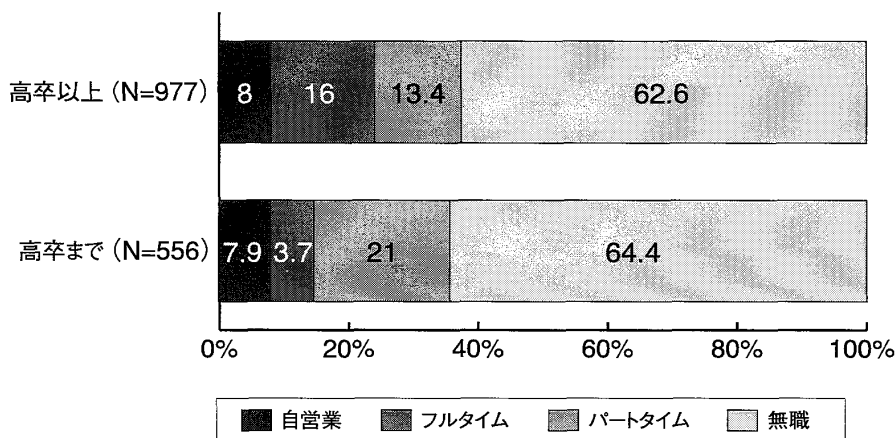


図1 学歴と現在の職業

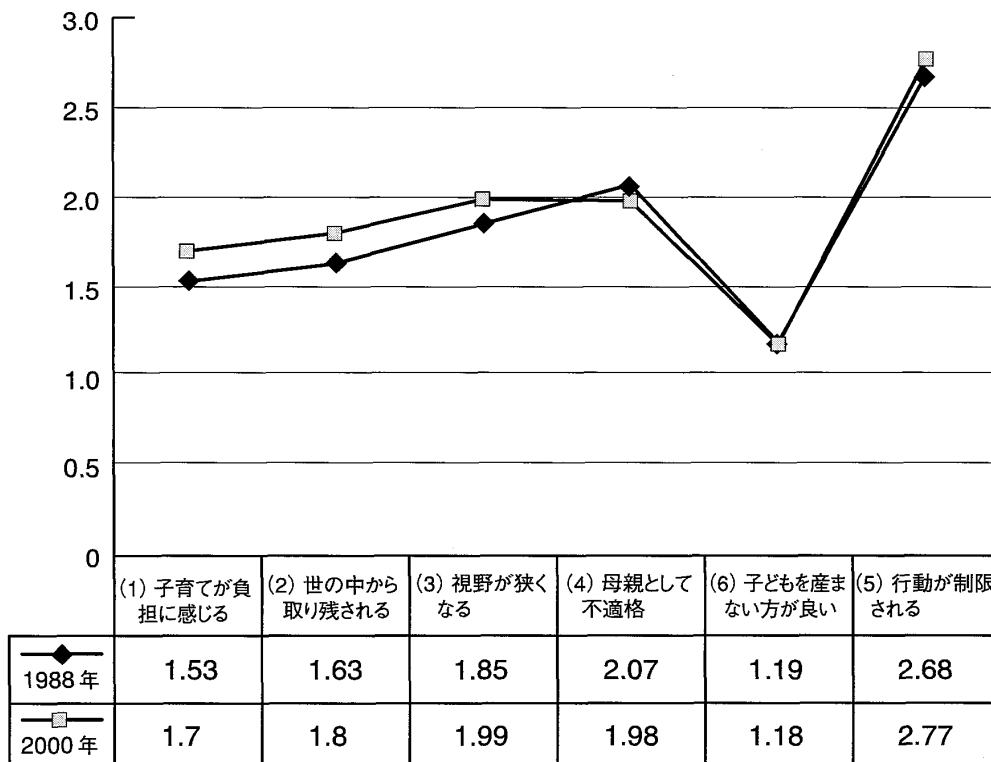


図2 母性意識推移

②母性意識否定項目の割合

母性意識否定項目のうち否定感が高かったのは「行動が制限されている」「視野が狭くなる」「母親として不適格」などで、特に「母親として不適格なのではないだろうか」と思っている人が約30%と、子育て中の母親の3人に一人が子育てに自信がもてていない状況がうかがえた。(図3)

③家族構成・年収・住居形態

家族構成・年収・住居形態で母性意識の関連を見たところ、差が見られたのは住居形態で、集合住宅に住んでいる人の否定感が最も高かった。この結果にはさまざまな要因があると思われるが、居住条件(例えば部屋数の問題)など、余裕も持って育児できるか否か、物理的な条件に左右され

ることもあるのではないと思われる。(図4)

④就業形態と母性意識

母親の職業では、フルタイム常勤群の否定感をもっとも低く、無職主婦群が最も高かった。(P<0.01)。母性意識各項目ごとの関連を見たところ、差が見られたのは「視野が狭くなる・世の中から取り残される」の項目で、無職(専業主婦群)の否定感が最も高かったがこれはある面では当然のことといえる。厚生白書(1997年版)によると少子化の一因として、母親の仕事と子育ての両立の負担をあげているが、今回の調査では、就業形態による差は見られず、一様に子育ての負担感を持っていることが理解された。(図5)

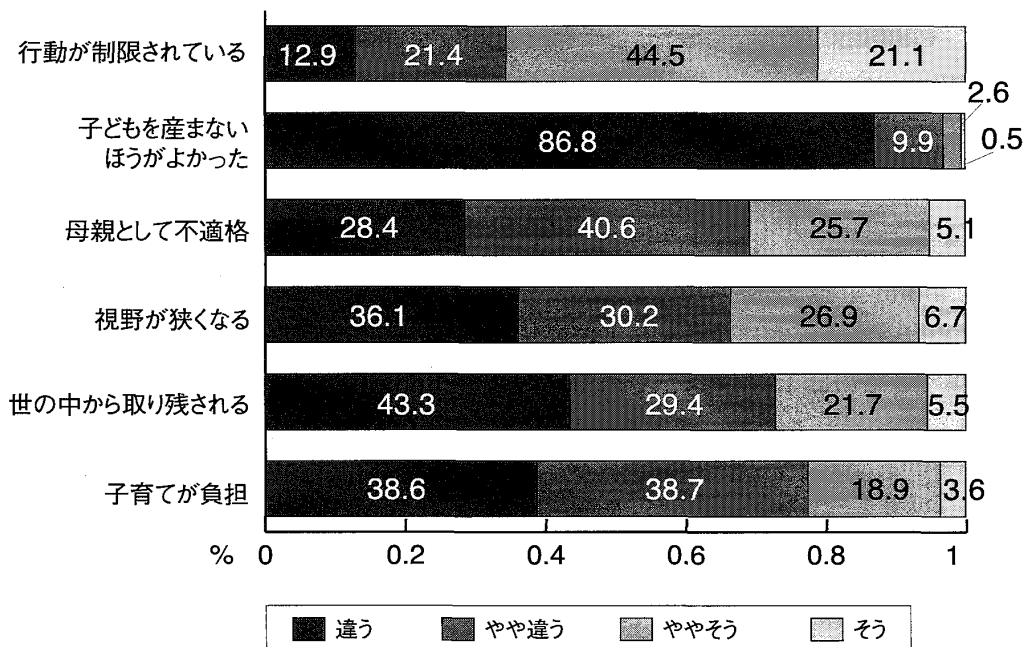


図3 母性意識否定項目割合

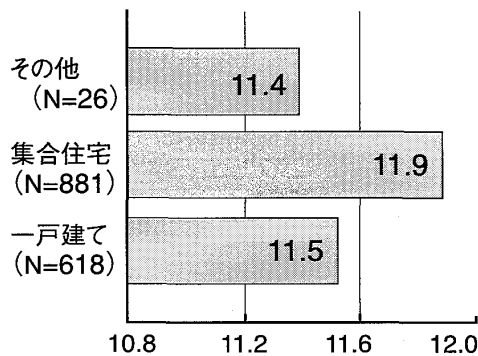


図4 住居形態と母性意識得点

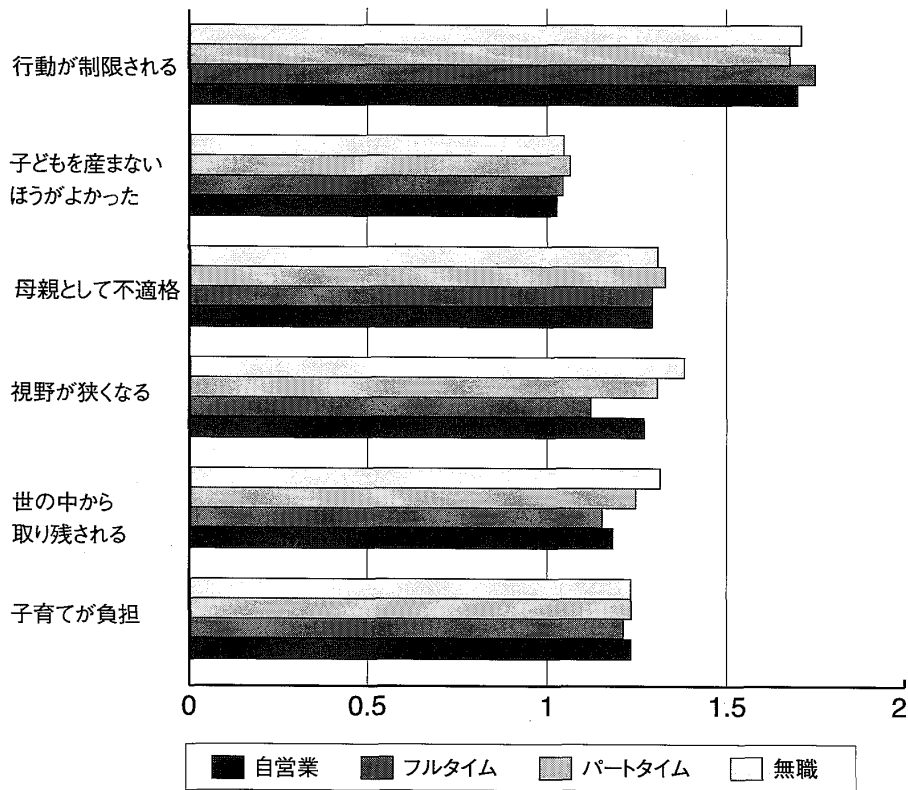


図5 就業形態と母性意識

⑤配偶者の関係と母性意識

図6に見られるように夫との関係が母性意識の否定感に影響を与えていた。電話相談でも「夫は仕事に忙しく、帰ってくるのは11時過ぎ。その間一人で、家事育児を行っている」との話が多く、また夫も育児に対し、自信がもてないのか「夫がいてもまったく見てくれないので、トイレにも子

供を連れて入る」「夫一人で子どもを見られないので妻が行くところどこへでもついてくる」など、母親は一分といえども育児から開放されていない状況を訴える。核家族で唯一の協力者である夫との関係のよしあしは母親に大きな影響を与えていると言える。

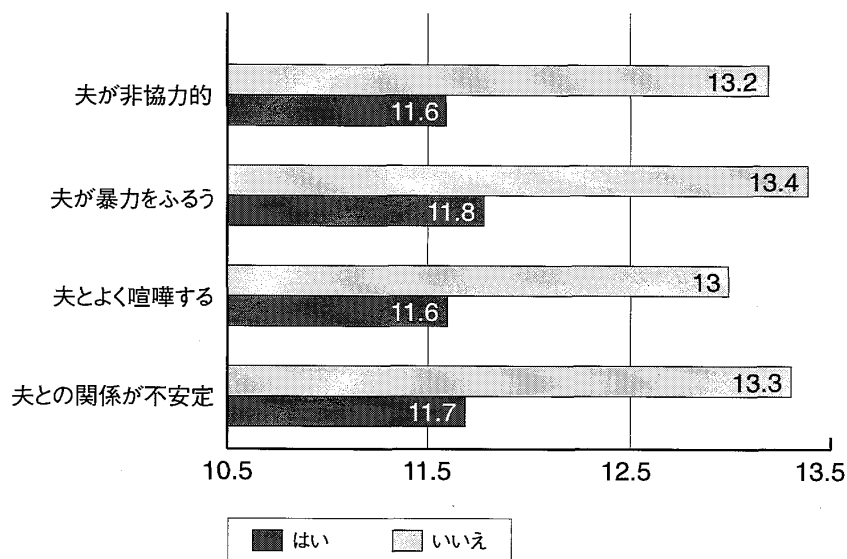


図6 配偶者との関係と母性意識得点 (p < 0.01)

⑥育児協力者の有無と母性意識

母親へのサポートの内では、育児協力者の有無で差が見られた。特に実際の援助者の有無でその差は大きかった。母性意識を支えるにはまわりからのサポートが大きな役割を果たしていた。(図7)

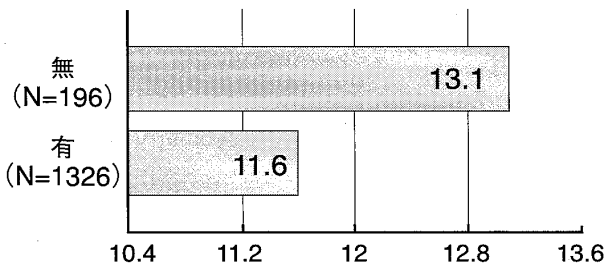


図7 子育て協力者の有無と母性意識得点 (p < 0.01)

⑦虐待傾向と母性意識

MCG (虐待当事者グループ) メンバーの協力を得、子どもに対する有害な行為を選択し、加算得点化したものを類型化し、虐待重症度 (虐待・虐待傾向・虐待なし) とした。母性意識と虐待重症度の解析を行ったところ、3群間で統計的に有意な差 (P<0.01) が見られ、母性意識との関連が伺われた。(図8)

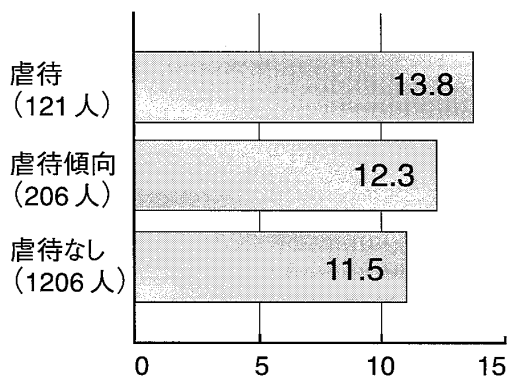


図8 虐待傾向と母性意識得点 (p < 0.01)

⑧ PBI 親子関係検査と母性意識

PBI 親子関係検査 (Parental Bonding Instrument) は Parker, G が開発した尺度 (1979) で、自らが受けた親からの養育態度の自覚評価スケールである。わが国でも摂食障害・強迫神経症など PBI を用いた研究が多くなされている。PBI は本来、父母両方を調査対象とするが、今回は調査手法及び質問

紙の都合により母親のみを対象とした。

PBI は愛情ケア項目と過保護・過干渉項目からなっており、それと母性意識との関連を検討した。母性意識得点を高得点低得点と2群化し、それとPBIの解析を行ったところ、母性意識否定感が高い群は否定感が低い群に比べ、愛情を受けたという認知が低く、過保護・過干渉は高かった。Parkerは「低ケア・高過干渉」型の養育態度は抑鬱症状や不安障害の発症に強く関連しているとしている。母性意識否定感が高い群はParkerのいう「愛情欠損型統制」のタイプの可能性もあり、子どもの養育にも影響を及ぼしている可能性が示唆された。(図9)

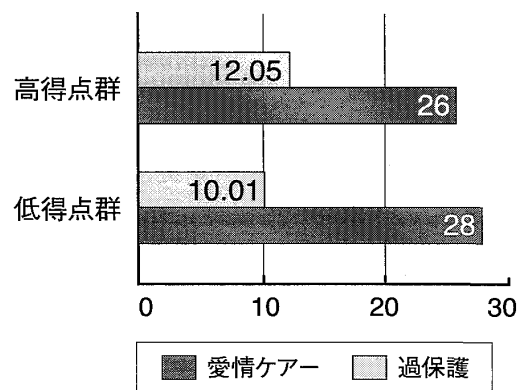


図9 PBIと母性意識得点高低群 (p < 0.01)

5. 母性をサポートする

母親の母性は当然に備わっているわけではなく、それを支える様々な支援が無ければ、母親としての機能も当然に損なわれてしまうことが今回の調査からも窺い知ることができた。そして電話相談でも「親から愛されてこなかったから子どもを私と同じ目にあわせてしまうのではないかと虐待連鎖の不安を訴えるお母さんも多い。ある相談者は

「父は短気な人で、きれると何をするかわからない人だった。いつも殺されるのではないかと思っていた。子供を生むと私と同じ思いをしてしまうのではないかと思い、生むのを迷った位だった。子供が自己主張して言うことを聞かないと、カーとして叩いてしまう。私と同じ思いを子供にさせたくないと思っても、どうしたらよ

いかわからない。夫からもいつか見捨てられるのではないかといつも不安がある。自分を肯定できなくて、「いや」と言うと周りから見捨てられるような気がして、恐くて言えない。」

と自身が受けたトラウマと、それから生じる子育ての不安を訴える。これらのお母さん達に対し、どのようなサポートが有効か今回の調査結果から以下のように考察を行った。

(1) 母親への具体的サポートの提供及びサポート資源の開発

今回の調査からソーシャルサポートの必要性が立証された。虐待当事者である母親からは、鬱状態のときの家事援助や子供の世話など、実際の援助が欲しいとの要望があるが、それらを裏付けるものであった。アメリカでは NPO により、妊娠中からのハイリスク家族（母子家庭や若年者の妊娠・周りからのサポートが受けられない家族や外国からの移民家族）に対して育児の講習・グループワーク・個別相談が受けられる。また、出産後もボランティアによる家庭訪問など育児・家事などの具体的支援や、心理面での手厚いサポートが受けられる。わが国においても早期に同様のサポートの提供が望まれる。

(2) 子育てスキルトレーニング

自分の母親から愛情をもらえなかった母親は、どう子供に接したら良いかを学ぶことなく成人してしまった可能性が高い。そのため、育児のスキルの講習、例えば子供との遊び方・叱り方・怒りのコントロールなど幅広い子育て技術の練習をすることにより、子育てへの自信を持てるようにすることが必要であろう。

(3) 母親に対する個別・集団ケア

母親自身が自らの母親から受け入れられるという体験をしていないところからくる、自尊心の欠如や愛着形成不全などを補うための、個別・集団ケアが望まれる。あるがままの子を受け入れるには、まずあるがままの自分を周りから受け入れられる体験をすることが先であるといえるだろう。

参考文献

- Bowlby, J. (1951): Maternal Care and Mental Health. 黒田実郎訳 (1967年). 「乳幼児の精神衛生」. 岩崎学術出版, 東京, 1967.
- 全児相: 62号別冊「全国児童相談所における家庭内虐待調査結果報告」平成9年
- Parker G: Parental characteristic in relation to depressive disorder. Br J Psychiatry 134: 138-147, 1979
- ・高橋誠一郎: Parental Bonding Instrument (PBI) と摂食障害. 季刊 精神科診断学 10: 417-427. 1999.
 - ・吉田卓史ら: 強迫性障害の PBI. 季刊 精神科診断学 10: 409-416. 1999.
 - ・大日向雅美: 「母性の研究」. 川島書店, 東京, 1988.